

あ と が き

この「人文学報」73号は、日本部の共同研究「明治維新期の研究」の報告書として特集されたものである。研究は1988年4月から1992年3月までの4カ年間に、以下の班員によって行われた。

佐々木克、飛鳥井雅道、落合弘樹、塚本明、藤井譲治、山本有造（以上所内）、青山忠正（大阪商大）、池田宏（滋賀県立図書館）、井上章一、園田英弘（以上日文研）、今西一（小樽商大）、鈴木祥二（立命大）、奥村弘（神戸大）、小股憲明（大阪女子大）、高久嶺之介（同志社大）、谷山正道（天理大）、高木博志（北大）、辻ミチ子（京都文化短大）、辻本雅史（甲南女子大）、原田敬一（仏教大）、平田由美（大阪外大）、藪田貫（関西大）、勝部真人（大阪教大付高）、手島一雄（立命大院生）、三沢純（広島大院生）、岸本覚（立命大院生）……現在の所属を記す……

最初に私たちは、以下の諸点をまず共通の認識とすることを確認して出発した。①明治維新の時期を、化政期から明治憲法期まで、広く設定する。言い方を換えると、19世紀の中に明治維新期を設定して検討する。②研究史の整理と再検討。③新発掘史資料の把握。④政治史偏重を避け、研究領域にとらわれず、自由に問題にアプローチを試みる。⑤近世史研究者と近代史研究者の研究の接点の場とし、お互いに大胆に相手の領域に踏み込んで発言する。そして、研究を進めるにあたっては、特にテーマを設定することや、問題点をしばらくこむことを避けた。その理由は、近世と近代を、連続した視点で見ること、および近世と近代の研究者が、共通した土俵で自由に発言・討論出来る場を作るという、まず以上のことを、この研究会では大事にしたいと考えたからである。そして、いわば近世史と近代史との相互チャレンジというこの試みは成功したと思っている。

この号の論文は、近世、近代それぞれ4本ずつとなっているが、たまたまそうなたただけで意図したものではなく、テーマも各自が自由に選んだ。また本号には書いていただけなかった方々を含めて、班員の各位には、興味深い報告と、活発かつ創造的な討論で、研究会を充実したものにしてくれた。その報告のいくつかは、すでに別の誌面で活字化されている。この研究会は、5年も続いたのであるから、研究報告を順次論文として発表してゆくことは当然で、こうしたことも研究会の有様のひとつであると思う。

1994年1月 佐々木 克